

かながわの
本



□神奈川大学広報委員会 編
□KADOKAWA
□☎(0570)002301
□770円

巧みで普遍的な感受性

幼時に旅したカンボジアの赤土を思い「粛清に使はれた銃砲夏光」と詠む。メーカラインかの文面に父の機微を感じて「鰯雲無口な父の絵文字かな」。言葉の巧みさもさることながらその感受性に感じ入る。神奈川大学全国高校生俳句大賞の受賞作品集である。審査員は長谷川權、復本一郎、黛まどから。21回目を数え、応募数は1万1022通に上ったという。最優秀は5人が3句ずつ紹介される。次の入選作品も3句ずつ。3句あれば、どんな町に暮らしているの

か、どんな高校生活なのか
が連想され楽しい。

最後の「一句入選」は逆

に、作者の背景が想像しに

くいところがいい。「太宰

忌や裏切り者も息をする」

「不眠症の脳の形や黒葡萄」

は闇の深さが心配になる

し、「捨てられたライター

を蹴る夏の果て」には不良

っぽさがある。「消しゴム

の裏に書かれたラブレタ

ー」「汗流す仲間と共にこ

ぶし突く」などは、高校生

らしい普遍的な作品だ。

選考会の議論を書き起こ

したくんだりも面白い。

(斉藤 大起)